

KOKORO

特集

学生支援本部における様々な学生支援

鈴木健一 教授



こころの支援実践分野の教員は、学生支援本部のスタッフを兼任し、名古屋大学の全学生を対象とした心の支援にあたっています。私たちは、日々の支援実践と、その成果を社会に発信する研究活動を両輪として取り組んでいます。

学生支援本部は、学生相談センター、キャリアサポートセンター、アビリティ支援センターの3つのセンターで構成されており、学内外のさまざまな機関と連携しながら学生支援を行っています。今回の特集では、筆者が所属する学生相談センターにおける様々な取り組みについて取り上げました。具体的には、学生相談（カウンセリング）による「三次支援」、グループ活動などを通じた早期発見・早期支援としての「二次支援」、予防や啓発活動を中心とした「一次支援」、そして2023年度からスタートした「研究環境支援」について紹介します。

3次支援「学生相談」

学生相談とは、高校まではスクールカウンセリングという名称で馴染みのある学内で利用できる無料カウンセリングによる支援のことです。名古屋大学では1956年から歴史があり、現在は年間約1千名の学生が利用しています。

2次支援「さまざまなグループ活動」

名古屋大学では10以上のグループ活動を展開しています。ここではいくつかを紹介します。

コレクション自慢の会

兼任教員の古橋忠晃先生が中心となり2007年にスタートしました。月1回、2時間開催しており、参加者は約15名です。興味や関心を示す interest には、「人と人との間」を意味する inter が含まれています。コレクションを通じたコミュニケーションが学生同士をつなぎ、その成長を後押ししています。

ゲームの会

毎週2時間、学生とスタッフがボードゲームやカードゲームを通して、競争や協力といった人間関係を体験するグループ活動です。ゲームを楽しんでいくに連れて、それまで受動的であった学生が主体的に行動するなどの変化も見られ、ゲームを介したコミュニケーションの効果を実感しています。

インドアの会

2019年に開始した、毎週1時間のグループ活動です。本、映画、ドラマ、音楽などについて、インドア派の学生が自由に好きなことを語り合います。毎年、延約100名の学生が参加しています。



カラフルの会

学内のセクシュアル・マイノリティの学生が集い、ざっくばらんに話せる空間づくりを目的として2023年9月から開催しています。毎回2時間、テーマに沿って語り合いながら交流をしています。



夕方さんぽ ノート



2026.3.13

夕方さんぽ

2022年10月に学生主導で発足した、自分のことを話しながら、また色々な人の話を聞きながら、すっきりあたたかい気持ちになる2時間のウォーキングイベントです。毎月夕暮れ時に開催しており、参加者は10~30名です。さまざまな学年や国籍の学生が3人1組となり、トークテーマに沿って会話をしながら大学内を自由に歩きます。終了時には、不思議と心があたたかくなるのを実感します。

コンパス (Communication on Campus)

2021年度より開始した、ともに生き生きとした社会を作り出せる人を育むことを目指したコミュニケーション力向上プログラムです。話す力、聴く力、協調する力、発案する力など、コミュニケーションに必要な力、をインタビューや企画会議、アクティブリスニング体験などのグループワークを通して体験的に学びます。2025年度は7回実施し、名大生延302名が参加しました。



1次支援「予防啓発活動」

全学教育科目「大学での学び」基礎論では、新入生全員を対象に対面授業を実施しています。また、心の健康アンケート調査を通して学生の心の状態を把握したり、YouTubeやX、インスタグラムなどのSNSを活用して情報発信も行っています。

研究環境支援～自由闊達な研究環境の醸成と、学生のウェルビーイングの実現を目指して～

2023年度より、名古屋大学の伝統である「自由闊達な学風」をさらに発展させるため、総長のリクエストにより「研究環境支援」を開始しました。名古屋大学には800以上の研究室があると言われていますが、それぞれの研究室を訪問し、学生と教職員が一緒になって言語・非言語のコミュニケーションワークに2時間取り組みます。実施後のアンケートでは、9割以上の参加者から「役に立った」とのフィードバックを得ています。教員からは「研究室立ち上げの参考になった」「有意義な内容だった」との声があり、学生からは「自分は修了して研究室を離れるが、後輩のためにも継続してほしい」との高い評価を得ています。





プロジェクト報告

発達障害児支援プロジェクト in モンゴル国

野邑健二 特任助教

子どものこころの専門医養成事業成果報告会

モンゴル国では、子どものこころの問題への関心が高まっている反面、それらの問題を診療する児童精神科医が非常に少ないという実態がありました。令和5年度より、モンゴル国立医科大学と協働で、モンゴル国で子どものこころの診療を行うことができる専門医の養成事業を実施してきましたが、2026年1月に研修成果報告会が開催され、名古屋大学からは金子一史センター長等が参加しました。本事業を通して、3年間で32名の児童精神科医が養成され、モンゴル国における児童青年精神医学会が創設されました。本事業は、令和5-7年度医療技術等国際展開推進事業の助成を受けて行ってきました。



子どものこころ専門医養成研修は、今年度、下記の通り実施されました。

8月に我々がモンゴルを訪問し、昨年度専門医研修を修了した10名の医師と再会し、その一人であるミヤグマルスレン先生が勤める、ウランバートル市バガヌール区保健センターを視察しました。

さらに3期生として今年度は12名の精神科医が専門医研修に参加しました。10月に本センタースタッフと、本学親と子どもの心療科加藤秀一先生、愛知県尾張福祉相談センター吉川徹先生、刈谷病院石島洋輔先生がモンゴルを1週間訪れ、児童精神医学に関する系統講義を実施し、ウランバートルから南東へ約200km離れたドンドゴビ県を訪れ、地域の総合病院を視察しました。12月には2週間の名古屋での研修に来ていただき、関連施設の視察、日本の児童精神科医との症例検討等の研修を行いました。



他に、モンゴル国で以下の活動を継続しています。

モンゴル国における発達障害児の疫学調査および現状把握調査



我々は、モンゴル教育大学とモンゴル医科大学精神科と共同して、モンゴル国内における発達障害の疫学調査を行っています。8月のモンゴル訪問時には、モンゴル国立教育大学にて、本調査に関する学術会議が開催され、調査を実施している3機関の代表者より調査の成果について報告されました。名古屋大学からは本センターの永田雅子教授・本学副総長等が参加しました。



田中ビネー知能検査モンゴル版の普及

2020年に本センターとモンゴル国立教育大学が共同で開発した田中ビネー知能検査モンゴル版の普及を進めるために、検査者養成研修を実施しています。現在までに約200名の修了生が誕生しています。今年度は、実際に現場で検査を使用している専門家を対象とした応用研修を開催し、田中ビネー知能検査の開発者である田中教育研究所の中村淳子先生からご講演をいただきました。本研修は、一部にセーブザチルドレンの支援を受けて実施しています。

発達障害児支援プロジェクト in ベトナム

本センターの発達障害児支援プロジェクトの一環として、ハノイ教育大学特別支援教育学部の Thu 先生の研究グループと共同研究を行っています。2025年7月8日から12日まで、ベトナム、ハノイを訪問し、研究ミーティングや関連施設の視察を行いました。

研究ミーティングでは、かねてより進めている、ベトナムの子どもに合った発達検査の開発に関する共同研究について、現状の共有やこれからの研究の詳細、課題について協議を行いました。

また、特別な教育ニーズのある子どもに対する初期介入のサービスを行っている特別支援教育訓練開発センターや、インクルーシブ教育のモデル園となっているハノイ市立の公立幼稚園などを見学させていただきました。実際にベトナムで発達支援が行われている現場を訪れ、支援者の方々からお話をうかがうなかで、ベトナムの子どもたちを取り巻く環境や文化的な背景が、発達支援の在り方に大きく影響していることを改めて実感しました。今後も、協議を重ねながらベトナムの子どもたちの文化や生活に即した発達支援に関する研究を展開していく予定です。



東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム

2021年に結成された「東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム」では、東海国立大学機構内の様々な領域の発達障害に関する研究者が集まって活動を行っています。アジアの発達障害研究を展開する機関とも連携しながら、発達障害児支援システム構築のための共同研究や、専門情報の発信を通して、学術・地域・国際的な観点での社会貢献を目指しています。

コンソーシアムには、心理学（発達、臨床、認知）、教育学（特別支援）、医学（児童精神医学、作業療法学）、工学などの専門家が参加しており、基礎から臨床まで多様な視点から発達障害児支援研究を展開しています。

社会貢献のための一つの活動として、コンソーシアム構成メンバーを中心とした、子どもの発達や支援に関する連続セミナーを開催しています。連続セミナーでは、1つのテーマに対して、分野の異なる専門家がそれぞれの専門領域から講演をした後、参加者も含めたディスカッションが行われ、活発な質疑応答がなされました。

第10回
東海国立大学機構
発達障害児支援研究コンソーシアム連続セミナー
AIによる発達障害の支援

2025年
4/16 水 18:00-20:00

オンライン開催
座長 村越 忍
(岐阜大学教育学部)

18:00~18:45
人工知能総論
寺田 和憲
岐阜大学工学部電気電子・情報工学科

18:45~19:30
手書き課題の定量的評価を用いた機械学習による書字障害の識別
〜海外の研究より〜
杉本 圭
岡山理科大学総合リハビリテーション学部理学療法学科
兵庫教育大学大学院連合学校教育学専攻

19:30~20:00
討論

申込締切 4/15 (火)
本セミナーは、名古屋大学「発達障害分野における治療的支援事業」の取組の一環として開催いたします。

名古屋大学心身の発達支援実践センター
発達障害分野における治療的支援事業
TEL:052-789-2611 FAX:052-747-6522
HP: <https://hattatsu-shien.cdpp.nagoya-u.ac.jp/>

東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム
連続セミナー
第11回
幼児から児童への育ちを支える

2025年
8/1 金 18:00-20:00

オンライン開催
座長 野越 健二
(名古屋大学心身の発達支援実践センター)

18:00~18:30
5歳児の発達
野村 哲
岐阜大学教育学部

18:30~19:00
5歳児健診の実践
横山 佳奈
名古屋大学心身の発達支援実践センター

19:00~19:30
数学科目習得を支えるための「あそび・学び・健診」の観点から
若林 紀乃
静岡大学教育学部

19:30~20:00
討論

申込締切 7/31 (木) 17時
本セミナーは、名古屋大学「発達障害分野における治療的支援事業」の取組の一環として開催いたします。

名古屋大学心身の発達支援実践センター
発達障害分野における治療的支援事業
TEL:052-789-2611 FAX:052-747-6522
HP: <https://hattatsu-shien.cdpp.nagoya-u.ac.jp/>

東海国立大学機構発達障害児支援研究コンソーシアム
連続セミナー
第12回
子どもの生活と時間に関する発達支援
—睡眠の問題と時間管理の発達の観点から—

2026年
1/7 水 18:00-20:00

オンライン開催
座長 横山 佳奈
(名古屋大学心身の発達支援実践センター)

18:00~18:45
「朝起きられない」を治療し若者の未来を守る
—起立性調節障害と睡眠相後遺症療育への支援—
神林 崇
筑波大学 国際統合睡眠医科学研究機構

18:45~19:30
子どもの時間処理能力の発達と日常生活に関連する時間管理支援について
佐野 美沙子
名古屋大学大学院医学系研究科総合健康学専攻 作業療法科学講座

19:30~20:00
討論

申込締切 1/5 (月) 17時
本セミナーは、名古屋大学「発達障害分野における治療的支援事業」の取組の一環として開催いたします。

名古屋大学心身の発達支援実践センター
発達障害分野における治療的支援事業
TEL:052-789-2611 FAX:052-747-6522
HP: <https://hattatsu-shien.cdpp.nagoya-u.ac.jp/>



ペアレント・トレーニング実施者養成研修

発達障害児支援プロジェクトでは、心理発達相談室において、2008年からペアレント・トレーニングを行っています。ペアレント・トレーニングとは、発達障害の子どもを育てる保護者の方々を対象にグループセッションの形式で行われるプログラムで、発達障害の子どもたちの行動を理解して、適切な関わり方を具体的に学習・練習し身につけることを通して、より良い親子関係づくりと子どもの適応行動の増加を目指すものです。2022年からは名古屋市発達障害者支援センターりんくす名古屋と協働で、発達障害の子どもやその保護者の支援を行っている支援者を対象に、ペアレント・トレーニング実施者養成研修を開催しています。今年度は17名の参加者があり、全体への講義とともに、4グループに分かれて、実際に保護者役と支援者役に分かれてセッションを体験する実習が行われました。こうした取り組みを通して、ペアレント・トレーニングの更なる普及と支援者の技量向上の寄与できればと考えています。



アザム先生招聘

Azam 先生を客員教員としてお迎えして

金子一史 センター長



マレーシア工科大学（Universiti Teknologi Malaysia）の心理学部で上級講師を勤めている WAN MOHD AZAM WAN MOHD YUNUS 先生を、外国人客員教員として2025年8月29日から9月19日まで招聘しました。Azam 先生の専門は臨床心理学で、英国の King's College of London, Institute of Psychiatry で博士号を取得したとても優秀な若手研究者です。研究テーマは、デジタル技術を用いたメンタルヘルスへのアセスメントおよび介入であり、実験法、ランダム化比較試験（Randomized Controlled Trials: RCTs）システマティックレビュー、メタ分析、質的研究法など、心理学の最新の各種研究方法にも精通しています。

招聘期間中に、4回の特別講義を実施しました。それぞれの講義では、AIを活用した大学生のメンタルヘルスリテラシー向上の試み、心理学・健康科学におけるシステマティック・レビューの実践方法、職場の打つ対策としてのWebセミナーの開発と評価、コロナ禍前後における青少年のメンタルヘルスを取り扱っていただきました。AIやセミナー用のWeb開発の様子など、最新の取り組みについて紹介され、受講した多くの大学院生と共に大変刺激を受けました。また、滞在中には今後の共同研究の実施や、教育発達科学研究科との学術交流に関する覚書の準備を進めていくこととなりました。2026年にはマレーシア工科大学で心理学の国際学会を開催する予定となっており、ぜひとも本学教育発達科学研究科の多くの大学院生に参加してほしいとのことでした。

今回の招聘をきっかけとして、両大学の相互の関係が益々深まり、国際的な取り組みが今後さらに活発になることを強く見込むことができる招聘となりました。



日本学生相談学会第43回大会を開催しました

鈴木健一 教授

2025年5月10日（土）から12日（月）にかけて、日本学生相談学会第43回大会を名古屋大学を主催校として開催しました。日本学生相談学会は、大学や短期大学などの高等教育機関において、学生相談室やカウンセリングセンター、保健管理センター等で学生支援に携わるカウンセラーや教職員、研究者が集まり、実践と研究の交流を行う会員数約1,400名の全国規模の学会です。本大会の準備委員長はこころの支援実践分野の教授である筆者が務め、準備委員として同分野の杉岡正典准教授、林陽子助教、ならびに、こころと社会のつながり分野の野村あすか准教授が参画しました。20年ぶりとなる名古屋大学での開催には事前予約の参加者に加えて多くの当日参加者を迎え、参加者数は600名を超える盛況となりました。

大会初日は12のワークショップを実施しました。学生相談の基礎的な考え方から、学修者の多様性に配慮した教育（UDL）、アタッチメント、自傷や薬物依存への対応、さらには地域資源と連携した「社会的処方」の実践事例まで、幅広いテーマが扱われ、各ワークショップは5時間にわたる充実した内容となりました。本ニュースレターで紹介している「夕方さんぽ」も参加者に体験していただきました。

2日目は教育学部棟を中心に14の事例研究、22の実践研究、21の調査研究の合計57本の研究発表が行われ、ピア・サポート、危機介入、キャンパス間の引継ぎ、留学生支援、メンタルヘルス教育など多様なテーマについて議論が交わされました。

最終日は豊田講堂において、将棋棋士の杉本昌隆先生（藤井聡太竜王・名人の師匠）をお迎えし、「師匠が語る弟子・藤井聡太という才能」と題した特別講演を開催しました。厳しい昇段制度のもとで挑戦と挫折を体験する若手棋士を育ててこられた杉本師匠のお話からは、教育に携わる者にとって多くの示唆を得ることができました。何手も先を読む将棋の世界において示された、杉本師匠の「人と人との関係性を読む力」の重要性は、学生支援にも通じる示唆深いものでした。午後は大会シンポジウム「学生相談における多能性の追求」を開催し盛況のうちに大会を閉会しました。

本大会では、学生相談の実践と研究の両面において充実した内容が展開されました。また、名古屋大学の学生相談という特色あるフィールドを生かした多彩な企画を通じて、学生相談の現在の到達点を確認すると共に、未来に向けた議論も深める貴重な機会となったと感じています。



アビリティ支援センター活動報告

工藤晋平 准教授

アビリティ支援センターは、障害のある学生の支援部門として、当初障害学生支援室として2010年に開室されました。どのような学生でも訪れやすいように、2020年に現在の名称になりました。全学教育棟という1年生が最初に授業を受ける建物に設置され、どの学生に取ってもアクセスのしやすい環境を整えています。センターの中には自習（居場所）スペースがあり、疲れた時の休憩所として、あるいは1人ではできない自習をする場所として活用され、毎日2-5人の学生が利用しています。

ここで提供している支援は大きく異なる2つの側面から成り立っています。1つは合理的配慮にみられる権利保障という性質です。たとえば、耳の聞こえない学生は口頭での講義では授業の内容にアクセスができません。このような「構造」はその学生にとって学びの障壁となります。合理的配慮は学修へのアクセスの障壁となるこうした制度、仕組み、風土などを可能な限り取り除くための個別の調整を行うもので、その支援を通して学ぶ権利を保障しています。もう1つは学生の成長を支える学生相談としての側面です。障害の有無にかかわらず、大学生活の中で学び、人と交流し、活動を重ねていくことは、学術的な知とともに人生の経験値を増やしていくことになります。その道行きを支え、青年期の成長を支えるという側面があります。ここには学修のみならず、自分のこと、生活のこと、これから先の人生のことも含まれており、そのため、アビリティ支援センターは修学支援部門とライフデザイン支援部門という2つの部門で構成されています。

修学支援部門では、合理的配慮の相談の他、文章を書くことが苦手な人のための作文教室、課題やスケジュールの確認を行うなどの個別の履修支援、自分に合った学び方を探す学修相談、授業内容の理解を助ける学修サポート、入学時のつまづきを軽減する大学入学準備講座などを行っています。ライフデザイン支援部門では、日常生活での困りごとの相談、リマインダーや音声文字化アプリなどIT機器の使用の助言、自己理解のための心理検査、グループでのソーシャルスキルプログラムなどの提供を行っています。こうした活動を学生サポーター air（あいる）が手伝ってくれていて、airのメンバーはまた、手話 de ランチという自主的な勉強会、他大学との交流、イベント企画などの活動を積極的にしてくれています。

毎年3,000件ほどの相談があり、100名を越える学生と200名を越える教職員の相談に対応しています。その数は多少の増減はあっても増加傾向にあり、それはこれからはばらばらしくは続くものと思います。どのような学生もその学生の能力に合った学修の機会を得られるよう、環境を整え、成長の機会を得られるように環境整備からパーソナルな支援まで、総合的な支援を継続していきたいと思っています。



退職のごあいさつ



杉岡正典

名古屋大学に着任してからはや10年と少し、気がつけばもうそんなに時間が経っていたのかと、時の流れの速さを感じて、しばし考え込んでしまいます。

振り返れば、名古屋大学の学生相談も全国の学生相談も、この10年で大きく変化し発展してきました。かつては一部の学生のための相談活動であった学生相談が、全学の学生を対象とした支援活動へと拡大し、コロナ禍を経て、より全学教育に視野を広げたアウトリーチや教職員連携が活発化しています。学生相談は、大学という教育組織の内側から、その組織の一員として活動できるという強みを最大限に生かして日々進化しているのです。名古屋大学の学生相談センターは、その変化を推し進める全国的な原動力の1つです。そのような組織の一員として仕事ができ、多くの学びを得たことは、私にとってかけがえない経験となりました。カウンセラーを始めて20年近く経ちましたが（この時の流れにも立ち眩みがします）、ここでの経験が

私のカウンセラーとしての自己形成の中核になっているように感じます。

在職中、私が特に関心があったのは学生の自殺予防でした。これまで生きにくさを抱えてきた学生、キャンパスで孤立する学生は、カウンセラーとしてぜひとも関わりたい相手でした。しかし、そういう人ほどなかなか自発相談はしてくれません。学生相談センターでは、皆で知恵を絞りながら彼らとつながる方法を模索してきました。うまくいくこともあれば、そうでないこともありましたが、危機が起こってから事後的にそのことを知ることも少なくなかった。こころ残りが1つあるとすれば、自殺予防の実践と研究が私の中で道半ばのままであることでしょうか。しかし、この道半ばの感覚は実践・研究活動の常でもあるし、先の方向を照らしてくれる灯台のようでもあります。同僚のカウンセラーと一緒に頭を悩ませた記憶もある。自殺予防は、今後のカウンセラー人生において少しずつ取り組んでいきたいテーマになりました。

センターの先生方や関係者の方々には、いつも温かくご指導いただきました。本当にありがとうございました。



竹本美穂

この度、名古屋大学での5年間の任期を終えることとなりました。はじめに、この間ひとかたならぬご指導とご支援を賜りました皆様に、心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

心の発達支援研究実践センターにおいて、“実践”の部分を担当立場として過ごした5年間は、私にとって大変貴重で学びの多い時間でした。多くの学生の支援に携わり、一人ひとりの悩みや迷い、そして成長の過程に寄り添えたことは何ものにも代えがたい経験です。特に障害のある学生の社会移行支援では、学内にとどまらず、企業や支援機関の皆様とのつながりを大切にしながら、学びと実践、そして社会を結ぶ役割を果たせるよう努めてま

いりました。多くの皆様のお力添えのおかげで、数多くの学生が自分らしい進路を見出し、社会への一歩を踏み出していく姿に立ち会えたことは、私にとって何よりの財産です。

学生の社会への移行は、障害の有無にかかわらず、その人の人生における重要な節目であり、将来に大きく関わる選択の連続であると感じています。その過程に関わらせていただいた責任の重みを、今あらためて深く実感しております。また、研究に関しましても、現在取り組んでいる学生の社会移行に関するテーマを中心に、今後も学生や若者を理解する一助となるよう探究を続け、実践と結びつけながら社会に還元していきたいと考えております。

ここで得た経験とご縁を大切に、これからも目の前の一人ひとりと誠実に向き合ってまいります。皆様の今後ますますのご活躍とご健勝を心よりお祈り申し上げます。御礼のご挨拶とさせていただきます。



三谷真優

このたび、2026年3月をもちまして、心の発達支援研究実践センター 特任助教を退職することとなりました。

2024年4月の着任から2年間、多くの方々に支えられながら、教育・研究・臨床の現場に携わる貴重な時間を過ごさせていただきました。

着任当初は、大学という場で自分が何ができるのか模索する日々でしたが、センターの先生方、学生の皆さん、学内外の関係機関の方々との出会いを通して、「子どもの発達を多面的に理解し、言葉にして伝えること」の大切さを改めて学ぶことができました。

これまでの臨床経験を土台にしながら、研究や授業、実践活動を行えたことは、私にとって大きな財産となりました。

学生の皆さんの研究や臨床に臨むひたむきな姿勢や、悩みながらも向き合っていくこうとする姿勢に何度も力をもらいました。

先生方の学生指導への温かいまごしと、私の忙しさなどを気にかけてくださる優しさに支えられ、安心して自分の役割に向き合うことができました。

困ったときには立ち止まって話を聞いてくださり、時には背中をそっと押してくださったことが、日々の励みとなっていました。

短い在职期間ではありましたが、温かく迎え入れてくださり、自由に挑戦させてくださったこの環境に、心より感謝申し上げます。

未熟な点も多く、ご迷惑をおかけしたこともあったかと思いますが、その一つひとつが私を育ててくださいました。

今後は、これまでの学びを糧に、子どもと保護者、そして社会をつなぐ実践と研究を、別の形で続けていきたいと考えています。

ここで築いたご縁を大切にしながら、それぞれの場所でまたお会いできることを願っています。

これまで本当にありがとうございました。

皆さまの今後のご活躍と、心の発達支援研究実践センターのさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。



スタッフ紹介

■センター長・こころの育ちと家族分野



金子一史
教授・発達臨床学、臨床心理学
●研究テーマ：
・産後うつ病およびボンディング障害への介入
・児童期のメンタルヘルスに関する日本とフィンランドとの国際比較研究

■こころの育ちと家族分野



永田雅子
教授・発達臨床心理学
●研究テーマ：
・周産期の母子支援
・発達障害の早期介入
・乳幼児精神保健



三谷真優
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・早産児の社会性の発達
・心理職の熟達化

■こころと社会のつながり分野



野村あすか
准教授・学校臨床心理学
●研究テーマ：
・子どものウェルビーイングと学校・家庭環境とのかかわり



野呂健二
特任教授・児童精神医学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・乳幼児の発達支援
・発達障害児の家族のメンタルヘルス



横山佳奈
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害の臨床
・子どもの社会性の発達支援



伊藤 拓
特任助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・後悔経験の適応的意義

■こころの支援実践分野



鈴木健一
教授・臨床心理学、精神分析
●研究テーマ：
・学生相談における対人関係精神分析の援用



杉岡正典
准教授・学生相談
●研究テーマ：
・大学生への心理的援助
・地域援助、コミュニティ心理学



工藤晋平
准教授・臨床心理学
●研究テーマ：
・障害のある学生の修学支援
・非行・犯罪臨床への精神分析的アプローチ



竹本美穂
助教・就職相談
●研究テーマ：
・大学生のキャリア支援
・障害学生のキャリア支援



林 陽子
助教・臨床心理学
●研究テーマ：
・発達障害学生の大学適応



和田尚子
特任講師・精神療法学、精神病理学
●研究テーマ：
・留学生のメンタルヘルスと精神療法



2026年度予定

2026年度 招聘教員

Sari Ahlqvist-Björkroth (サリ・オールクヴィスト・ビョークロート) 先生
University of Turku (トゥルク大学)

研究テーマ：妊娠から幼児期の親子関係に影響を及ぼす環境的および心理社会的要因

招聘期間：7月1日～31日

●編集後記

センターニュース第17号をご覧いただき、ありがとうございました。今号では、「こころの支援実践分野」である本学学生支援本部学生相談センターの取り組みに加え、アビリティ支援センターの活動についてもご紹介しました。本学では、悩みを抱える学生への個別相談対応に加え、心の健康アンケートの実施、グループ活動やセミナーの開催、教職員との連携など、多岐にわたる学生支援を行っています。多様な背景をもつ学生一人ひとりが安心して学び、自己理解を深め、自身に合ったキャリア選択をしていけるよう、今後も様々な形で支援を届けていきたいと思っております。

また、発達障害児支援プロジェクト等の展開についてもご報告しました。当センターで積み重ねられてきた研究実践の知が、国内外の研究機関との連携の中でさらに発展していると感じていただければ幸いです。今後もセンターの活動にご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

林 陽子 助教 記



名古屋大学心の発達支援
研究実践センターニュース

NO.17・2025年度